
らき☆すた～高校ボクサー

ラーズグリーズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき☆すた〜高校ボクサー

【Nコード】

N7226I

【作者名】

ラーズグリーズ

【あらすじ】

彼の名前は神田 勇、陸桜学園の生徒で二年間は友達が出来ず。ボクシング一筋でやって来た。そんな彼は三年になり彼の生活がある女性達の出会いにより変わり始めた。

らき☆すたはアニメ出ししか見てないので間違いがあったらごめんなさい。

始めに

俺の名前は神田 勇陸かんだゆう桜学園の学生だ。

この学園に来て今年で三年になるつまり今年は学園生活最後の三年生になることになる。

別に俺にとっては高校生活の最後はどうでもよかった俺はプロボクサーだから卒業の後の事はまだよく考えてない。

まあそれはよしとして今年最後の学校生活を送りますか。

第一話く出会い（前書き）

素人作品です

第一話く出会い

今日は俺が陸桜学園の三年生になる日である俺は自分のクラスがどのクラスなのか見ていた。

「えーと・・・あったB組か」

俺は自分のクラスを確認して俺は自分のクラスに行こうとした時であった。

青髪の女性とぶつかってしまい（かなり下のほうに）その女性は倒れてしまった。

俺はその女性に謝ろうと女性に近づいた。

「ごめん、大丈夫？」

「うう、これはフラグだったかな」

・・・えーと俺は詳しく聞き取れなかったので青髪女性の言葉を無視して女性を手を握り起こした。

「俺がよそ見して気が付かなかったよ、じゃあね」

俺は青髪の女性に謝りその場を後にして自分のクラスに向かった。

【B組クラス】

B組のクラスメートの皆が集まった、しかし俺が二年で知っている奴はいなかった俺は陸桜学園の一年、二年は友達が出来なかったクラスでも少しクラスメートとテレビの話題やマンガの話で少し話した程度であった。

でも俺はプロボクサーだから学校の帰りの寄り道はしないで学校帰りはジムに直行する。また、そんな学校生活を送ると考えていた時であった。

「ヤッホー！さっきはありがとう」

一人の青髪の女性が俺に話しかけてきた、そう俺がさっき突き飛ばして俺が謝った女性であった。

「いや、【ありがとう】て言われることしてないし、俺が悪いんじゃない」

「いやいや別に良いよフラグだったし」

この女性の言葉のフラグとゆう言葉はなんなのか俺は分からなかった、そこで俺は・・・

「それより、フラグってなに？」

俺は自分の正直なことを青髪の女性に聞いてみた。
すると女性が信じられないような顔で・・・

「知らないの、ギャルゲーやエロゲーの基本用語だよ！」

「いや・・・そんな風に言われても」

俺は青髪の女性の気迫に少し引いてしまったが最後の用語は不味いでしょ高校生として！
そんなやり取りをしているうちにチャイムがなった。

「あ、じゃあまた後でね」

「あ、ああ」

俺の最初の三年生としての始まりがなんとも不思議な女性との出会いであったが・・・あ、名前聞くの忘れた、でも後で聞くからまあいいか。

それから先生が教室に来て軽いホームルームをやり終わり先生が残りの時間は好きにして良いと言った。

それからクラスの皆はそれぞれ話していた。

そして俺も・・・

「まだ、自己紹介がまだだったね私は泉　こなたよろしくね」

青髪の女性は泉　こなたと言うらしいそして泉以外にも女性が約二名いた、どうやら泉の友達らしい。

「こなちゃんから話しは聞いたよ私は柊　つかさ、よろしくね」

ライトパープルの髪でショートでリボンを着けた女の子であった。

「高良　みゆきですよろしくお願いします」

ピンク色の髪でロングヘアーで眼鏡をかけた真面目な印象の女性であったそれ以外にも胸が・・・いや言うのはよそうなんか初対面なのに失礼だし。

努力しても手に入らないと思う存在が一人いるし。

「なんか・・・失礼なこと考えてなかった」

「いや、何のことやら」

泉に俺の考えがばれそうになり少し焦った、これから気を付けようと思った一面であった。

「俺は、神田 勇よろしく一応プロボクサーだ」

俺も簡単な自己紹介を泉達に言った。

すると泉達は驚いた顔で俺に話してきた。

「え、勇はプロボクサーなの!!」

「へえーすごいね!!」

「驚きました!」

泉達は俺がプロボクサーなのを聞いて驚いたようだ別にまだデビューして一年しか立ってないけどそれより泉が・・・俺のことを下の名前で呼んだことに俺はツツコミを入れようとしたが初対面なのでそこはやめた。

「でも、そうなりますと進学とかはしないんですか？」

高良が俺に進学のことを聞いてきたそれはそうだろ学生でプロボクサーなのだから普通なら進学やら就職やらで道を見つけるものだろうだが俺は・・・

「別に良いよ進学するきはないし」

「大丈夫なんですか」

「だって家がラーメン屋だし」

俺は実家がラーメン屋のため家を継ぐために大学や就職したりはしないボクシングをしながら家のラーメン屋を手伝うつもりだ。こんな感じで話が進んで行くなか泉がまた・・・

「ねえ、勇はの中で惚れた人はいるの？」

「また下の名前で・・・て！おい！！」

なに言ってやがる初対面の男子にそんな質問するか普通！！
そんな泉の質問に柊や高良が・・・

「こ、こなちゃん」

「い、泉さんそれは・・・」

二人とも顔が赤くなっていた。

泉はそんな中をニヤニヤ顔が笑っていた。

そして俺は泉の破天荒な質問に疲れた、そんなこんなで時間が終わる帰りのホームルームが終わりクラスの皆が帰りの準備をしていた、そんな俺も帰りの支度をしていた時であった。

「ヤッホー勇、帰りにゲーセン寄らない？」

「悪いな、俺はこれからジムによらなきゃいけないんだ」

一応俺はプロボクサー寄り道は出来ない。
そんな俺の発言に泉が不満げに・・・

「ブーブー、人付き合いわるいよ」

「文句いうな、じゃあな」

俺は泉の言葉を見殺しして俺は学校を後にジムに直行した。

「よしついた」

俺はジムについたここのジムは陸桜学園から歩いて10分くらいでつくジムである。

ジムの名前は【陸桜拳闘ジム】陸桜学園から取った名前のジムでこのジムが建って二十年になる。

その年代で、日本チャンプが五人、東洋チャンプが三人が出てるがいまだに世界チャンプはゼロ一応、世界ランカーになった人はいたが世界挑戦は数回あったが失敗に終わっている。

「失礼します」

そして俺のいつもの日常生活が始まる。

第二話〜日常（前書き）

らき☆すた、らしくないボクシングの話がほとんどです。
かがみは次当たりでます。すいません！！

第二話　日常

ジムの中に入ると練習してる人がたくさんいた。
縄跳び、ミット打ち、スパーリングなどいろいろとやっていた。

「よう勇、来たのか」

この人はこのジムの先輩で俺と同じプロボクサーの赤木 あかぎさしき 才気である。

Sウェルター級の日本チャンピオンである。特徴は身長が180センチありワイルドな感じな人である。

「会長がまつてるぞ」

このクールな人はこの人も赤木さん同様の俺の先輩、小田 おだてつや 鉄也さん、ライト級の日本ランカーで現在ランキングは4位である。
身長は176センチはある。

「わかりました」

俺は二人の先輩に礼をして更衣室に入って着替えに入った。

「準備が出来ました、会長」

「うむ、ではまずは縄跳びからじゃ」

この人はこのジムの会長で名前は花山 はなやまげん 現年齢は70歳を越えており昔は戦後でのボクサーであったらしい。

俺は会長に言われたとうり縄跳びをやった。そして縄跳びが終わったそして次の練習メニュー移った。

「ようし次はスパーリングじゃ」

「はい！」

俺はスパーリングの準備を始めた。

まずはバンテージ呼ばれる包帯を腕に巻くこれは拳の怪我を防ぐものである出来る限りは厚く巻くそしてヘットギアを被り最後はグローブをつける。

グローブといっても着けるのは16オンスのグローブである。

スパーリングなどでは12オンスから16オンスといったグローブを着けるものである。

オンスとはグローブの重さと大きさを示すものである。

簡単に言えばプロの試合では8オンスのグローブを使う。

アマでは6オンスを使うしかしアマはスパーリング同様ヘットギア等を被るしかもグローブもプロと比べれば柔らかい簡単に言えばプ

ロは相手との倒しあい、アマは技術の競いあいである、アマからプロに転校する人もいる。

例をあげればアマで実績がある人は大抵はデカイジムが契約金を払いそのジムが取ってしまう。アマでの実績はプロの実力に直結するからだ。

「準備が出来ました会長」

「ようし、相手は田中じゃ貴様と1階級上じゃがしっかりやれ!」

「はい!!」

こうして俺はリングに上がった。

「よ!勇、悪いが負けないぜ!!」

こいつは俺の同輩の田中力たなかりきで同じ高校三年でプロボクサーで会長の言うとうり俺の1階級上のSフェザー級である。

「ああ、じゃあ準備はいいぜ!」

こうして俺と田中はリングに、にらみあいそしてゴングになった。

「はあ!!」

「であー!!」

俺と田中は一直線にダッシュしてそこで打ち合った。

俺と田中は同じインファイター、インファイターとはボクサーのタイプの事を言うインファイターは、接近戦を得意として自分に力があるタイプの事を言うKO率は高いその分パンチをもらいやすい、もう一つはアウトボクサー華麗に足を使い相手のパンチを回避して相手にパンチを当てるタイプ、カウンター等を使い器用なボクサーを言うしかしインファイターほどのKO率は少ない。

最後はボクサータイプこれはさっき説明したインファイターとアウトボクサーの二つの戦闘が出来るボクサーの事を言う。

世界にでるボクサーは大抵がボクサータイプの人が多い。

それは戦い方に幅があるからだ。

「もらった!」

田中が俺に右ストレート放ったしかし俺はダッキングと呼ばれる回避でストレートを回避したそして素早く懐に潜り込みリバーブロを放った。

「があ」

リバーブロをくらい田中の膝が落ちた俺はそれを見逃さず。

「いただきー!!」

田中が膝が落ち俺は渾身のロングアッパーを田中に叩きこんだ。

「ぐはー!!」

田中の首が激しく飛び田中はそのまま倒れてしまった。

「ようし、それまでじゃー!」

会長の声でスパーリングは終わった。

そして俺と田中は会長に呼ばれてきた。

「よし神田、あの懷に潜りリバーブロからロングアッパーの連携はええぞ、しかしまだまだ甘い所があるそこを治して行くぞ」

いつも会長がスパーリングを見るとこうして甘い所や良いと頃を指摘してくれるから俺達は自分の甘い所を練習出来たりする。

「それから、田中ー!! 貴様、行きなり大砲を放つバカがおるかー!! あんなんじゃ避けられて当然じゃー!! 貴様は罰として左のジャブのみのミット打ちじゃー!!」

「そんないー!」

あまりにスパリングに不甲斐ないと会長直々に練習をさせられる
ちなみに田中は以前も同じ事をやっていた。こうして俺は別のメニ
ューをこなし今日の練習は終わった。

「「それでは失礼します」」

俺と田中は今日の練習を終えて会長に挨拶をした。

「うむ、東新人王戦まであと2ヶ月じゃ、気合いを入れるのじゃぞ
！！」

「「はい！！」」

こうして俺の1日が終わり俺は田中と別れ自分の家に戻った。

「ただいま」

「あら、おかえり勇」

俺の家はラーメン屋なので今は裏の出口から俺は入ってきた。
そして今のが俺の母さんである。

「で、どうだったの三年生になったんでしょ友達はできたの？」

「まあ、友達で言うにはまだ分かんないけど面白いやつにはあったけど」

それは今日の朝のでき事である。

泉 こなた、柊 つかさ、高良 みゆき、今までにない面白いやつら出会った。

まあ学校生活も悪くないと思った。

1日であったと俺は思った。俺は夕食を食べて部屋に戻り少し勉強して布団に入り寝て今日の1日を振り替えていた。

「（悪くないかもな、学校生活も）」

俺はそれをもって部屋の電気を消して今日の1日が終わった。

第三話　下の名前で双子の姉

ジリリリリリリ・・・ピ

この音は俺の目覚まし時計である現在の時間は4時半くらいだ。

ボクサーの朝は早い必ず朝はロードワークをしなくてはならないからだ。

俺はジャージに着替え家を出た。

「ハア、ハア、ハア」

ロードワークに出て数分がたっていた時であった俺は少し顔を振り向き一つの名字に目を向けてた。

「（終・・・まさかな）」

それは昨日のでき後とを思い出していた。

それは泉が昨日一緒に連れてきた友達の一人終　つかさの事を俺は思い出していた。

「(いくら何でも、近所な訳ないよな)」

ちなみに俺の家は二年前にこの地域に引っ越してきたのである。

前は神奈川県に俺はすんでいた。

神奈川でもボクシングジムにいたが前のジムの会長が今のジムを教えてくれた。

そして陸桜学園に来てもこれといった友達は出来てはいなかったのが現状であった。

これが俺の全てであるそうアイツとの約束を果たすために・・・

「ただいま」

俺はロードワークから帰り一応小さな声で帰りの声を言った。

そして俺はシャワーを浴びて制服に着替え今日の授業の支度をして朝食を食べて家を出る支度をした。

「行ってきます!」

「気をつけるのよ」

母さんの声だけ聞こえたちなみに父さんは店の仕事で今はいない、
そして俺はいつものように家を出た。

家を出て何分かった時であったそれは俺がロードワークをして通った道である。

そして俺はある人物を見つけた。

「ほら、つかさ早く行くわよ！」

「お姉ちゃん、待って眠いよ」

それは柊であった何故か柊の隣にもう一人の女性がいた。

柊と同じ髪の色だが柊とは違いショートではなくツインテールの髪であった。

「おい、柊」

俺は柊に声をかけたすると柊の隣に入るもう一人の女性も俺に振り向いた。

「誰？」

「あ、ユー君おはよー」

て、柊お前か！、泉にしろ柊にしろまだ知り合ってそんなにたっていないのに女子が男子を下の名前で呼ぶか普通！！
俺がそんな事を思っていると柊の隣にいる女子が柊に話しかけた。

「ねえ、つかさこの人誰なの？」

「同じクラスの神田 勇君だよ」

柊が俺の事を隣の女子に伝えてくれた。

「ああ、改めてよろしく柊と同じクラスの神田 勇だ所でそっちは？」

「そう、私はつかさの双子の姉の柊 かがみよ、よろしく」

どうやら柊の双子姉らしいしかし俺は気になる所があった。

「そういえば双子にしては似てないよな？」

俺は正直な事を柊姉、柊妹に聞いてみた。

「ああ、私達は二卵性だから似てないの」

なるほど確かに一卵性は似てるが二卵性は姉妹のような違いがあると前に聞いた事があるからな。

それから俺達は一緒に学校に行く事になった俺は初めて陸桜に入っ
て一緒に登校する事になった女子ならなおさら初めてであった。

それから学校に着くまで俺達は話しながら学校で話していた。

そして学校についた矢先に・・・

「おやおや勇は、もう、つかさとかがみんなとフラグたったの？（笑）」

「

泉と学校の前であってしまった。

しかも別に普通に登校と一緒に登校してきただけだと俺は思った
が、かがみが泉に・・・

「だから、お前はかがみんゆうな！！それにたまたま勇君とあって
一緒に登校してきただけよ」

それと・・・かがみ何故に俺を下の名前で呼ぶお前とは今日知り合
ったばかりだぞ俺は、それとどうして俺もかがみと呼ぶかは柊姉、
妹と呼ぶ訳にもいかず仕方なく俺は二人の事を下の名前で呼んでい
る。

そして泉がかがみの言葉に反応して・・・

「あれ、どうしてかがみが勇の事を下の名前で呼んでるのもしかして・・・」

「ちょっと待ちなさい！！つかさも勇君と呼んでたから、たまたまよ！たまたま！！それに勇君も私やつかさの事を名前で呼んでたわよ！！！」

おい！泉を俺に振るなよかがみ、泉はめんどくさいだからよ！！
そんな事を考えてると泉が俺に突っかかってきた。

「ずるい、かがみとつかさは下の名前で呼んでるのに私だけ名字で呼ばないでよ！」

くっつくな泉、周りの視線が気まずいんだよ（主に男子）早く退いてくれ！！

「離れろ泉！！」

俺としてはこれ以上は付き合いきれん！！
すると泉がまたしかも今度は・・・

「こなた・・・」

「は？」

「こ・な・た」

今度はなんだよ！！

しかもダ・〇ーポ〇の白〇なな〇見たいにやるな！！

結局これ以上は俺自身が持たず泉の事をこなたを言うようにした。

そのあとクラスについて高良とあいこなたとつかさを俺が下の名前で呼んでいてしたら高良が「私も下の名前で呼んでください」と言われて、こなたの件があったから俺はすぐに了承した。

主人公とオリキャラ紹介

神田 勇

身長165

体重56・8

この物語の主人公、陸桜学園に入る前は神奈川に住んでおりそこでもボクシングをやっていた。

家の事情により埼玉県に引っ越してきて陸桜拳闘ジムに移籍した、二年生になり自分の誕生日を迎え17になった時にすぐにプロテストを受けて合格した。

性格は無愛想ではないが友達づくりは苦手なほうでこなた達と会うまでは同じジムの田中意外は友人はいなかった、真面目な性格でボクシングに一筋で頑張っている今の目標は新人王戦で優勝することである。現在の成績

2戦2勝2KO

戦闘スタイル

インフアイター

田中 力

身長171

体重58・2

神田の同輩でお茶目な性格でのりが軽い。

神田とほぼ同じ時期にジムに入門してきた高校生、神田とは別の高校だが神田のよき理解者で友人である。

ボクシングのセンスは神田ほど高くないがパンチ力も上の階級にいながら神田より低いがいろいろと考えて試合に望むため曲者のボクサーである。

現在の成績

2戦1勝1分

戦闘スタイル

インフアイター

赤木 才気

身長182

体重69・5

神田の先輩で神田のジムではボス的な存在である。

昔、ケンカしている所を会長に止められ会長にスカウトされてプロの試合でデビュー戦で1ラウンドでKO勝ちをしてしまった。

それからのばく進劇が始まり現在までに無敗のまま日本チャンプにまでなった、そのため一度防衛しただけで相手がいなくなり現在試合が組まれずイライラしている。

だが神田やジムの間ではよき兄貴分である。

現在の成績

15戦15勝15KO

戦闘スタイル

ボクサータイプ

小田 鉄也

身長176

体重60

赤木と同じ神田や田中の先輩で去年の全日本新人王で最優秀賞を取った。ボクサーである、クールな性格で現在の日本ランクは4位である、ルックスも良いため彼の試合になると女性ファンが詰め寄る。戦いかたは日本では珍しいデトロイトスタイルと呼ばれる構えでそこからのフリッカージャブを得意としている。

現在の成績

9戦8勝6KO1分

戦闘スタイル

アウトボクサー

花山 元

神田のジムの会長である。

ジムには欠かせない存在である若いころはまだボクシングが拳闘呼ばれていた時代でボクサーをやっていた。

スパークリング等を見て相手の甘い部分をすぐに見抜く眼力がある

第四話く新たな日常、宿敵との再開（前書き）

ギャグと真剣な場面があるよ

第四話　新たな日常、宿敵との再開

新たな学校生活が始まり1週間がたった俺の環境は今までと全く変わった。

そうそれは、こなた達存在である今までの俺の学校生活からは考えられないものであった、そして今の状況がまさにそれであるそれは・・・

「ねえ、ユ一君の昼食はそれだけなの？」

「男子がそれだけで大丈夫なの」

「勇、コロネは渡さないよ」

「勇さん、足りるのでしょうか？」

今の時間帯は昼休みで昼食の時間だ。

それだけなら俺は、何も思わないだろうしかし今の状況は明らかにおかしいと周りと思うだろう。

それは男子一人、女子四人、合わせて五人で囲んで昼食を食べているのだ普通の男子ならうらやましいと思うだろうと俺は感じる。

それはさておき今の俺の昼食は牛乳とツナサンドイッチだけである。その昼食だけでは足りるのかと皆が俺に言ってきたのである。

別にたいした理由はないけど・・・

「別に、金が少ないからこれだけなんだけど」

これが正直な話である、実は昨日練習帰りに、赤木さんと一緒に定食屋に行ってきた俺は赤木さんとのちよっとした賭けに負けてしまい赤木さんに定食屋で飯をおごるはめになってしまった。何の賭けをしたのかはあまり言いたくはない。

「でも、それだけじゃユー君の体が心配だよ」

つかさが俺の心配をしてくれた俺は嬉しかったが俺は・・・

「大丈夫だよ、減量中はもっと食べないからこんなのへっちゃらだよ」

「え、減量中はもっと食べないの？」

「それで体、動くの？」

かがみとつかさが俺に聞いてきた、しかし俺の体格はフェザー級では小柄なほうで減量とかは無縁な方だがやはり試合が近くなると不安になるからあまり食べない事になっている。

「勇さん、ボクサーは大変なんですね」

「そんな事はないよ」

みゆきが俺に言ってきたが、この道でやっていく事を決めたから俺はそんな事を考えた事はない。

「思っただけどさ？」

こなたが俺にあらたまって俺を見た。

「勇がボクシングを始めたきっかけは何なの？」

「え？」

こなたが俺に聞いてきたそのこなたの質問に皆もこなたの言葉にうなずき俺に聞いてきた。

「確かに・・・」

「ユー君はどうして始めたの？」

「私も気になります」

皆が俺に教えて言わんばかりに俺に詰め寄ってきた。
俺はそんな皆を見て教える事にした。

「ボクシングが大好きだからだそれだけさ」

俺はそう答えたしかし周りは不満そうに・・・

「ちょっと、もう少し具体的に教えてよ」

こなたが不満そうに俺に近寄ってきたが俺はそれを無視した。
こなただけではなく皆も詳しく教えてと言ってきたが俺はそれ以上
は答えなかった。

それから昼休みは終わり午後の授業の準備に入る事にした。
最初是世界史であった

「起きんか泉!!」

「ふぎゃー!!」

世界史の授業が始まって少したった時に起きた、こなたが授業中に居眠りをしていたのを先生に叩き起こされたのである。

しかも拳骨でちなみに世界史の先生は黒井ななこ先生である一応俺のクラスの担任で居眠りと遅刻には容赦がない先生である。

何故か俺と同じ神奈川出身なのに関西弁を標準語にして使っているのであった。

それはさておき泉が拳骨で叩き起こされて泉が・・・

「先生・・・容赦なく叩きますね別にいいんですけど私以外にも容赦ないんですか？」

確かに黒井先生の授業で寝るやつはいないからな（寝るのはこなただけ）他のやつにも容赦ないのかなと俺は思った。

「そんな、事はあらへんちゃんと相手は選んどるで、あとあとめんどーやさかいな」

『普通に言った!!』

おい先生がそんな事を言っているのかよ!!

多分俺以外にもクラスのほとんどがそう思った瞬間であった。

「さてと、ジムに行くか」

授業が終わり俺はジムに行こうとした時であつた・・・

「ねえ勇、一緒に帰ろう」

こなたが俺に寄ってきた確か気が付かなかったが確かこなた達との帰り道の駅から、ジムとは途中までなら一緒に帰れることを思い出した俺は・・・

「途中までならな、俺もジムに行かなきゃいけないしな」

「うん、それでもいいよ」

そして俺はこなた以外にもかみ、つかさ、みゆきと一緒に途中までは一緒に下校する事になった。

今までの俺なら普通に考えられないとまた思った。

しかし・・・男子一人で女子四人との一緒での下校は明らかに異質だと周りからはそう思われるだろうと思った。

そして途中までの下校でかみがある事をはなした。

「そう言えば、また監禁事件が増えたわよねほら、自分にご主人様とか呼ばせて」

確かにそんな事件が前にニュースでやってたよなと俺はその事をかがみに言った。

その時にこなたが・・・

「確かにね、前も話したけどギャルゲーやエロゲーのやりすぎだよね」

「どうせ、あんたはやってるんでしょ」

ああ、こなたはやってるのかそれならあの内容に納得・・・ん？ちよっとまって！！

「おい、こなたお前・・・まだ18になってないよな何故しってる！！」

俺の言葉にこなたはニヤリと笑いかがみは何故かバツ悪そうな顔をしてつかさとみゆきは苦笑いしていた。

俺はこれ以上は聞かないことにした。

「お、俺はここまでだからじゃあな」

「バイバイ」

「「また明日ね」」

「勇さん失礼します」

俺はこなた、かがみ、つかさ、みゆきの四人に別れの挨拶を言った
そこから俺はジムに行こうとした時であった。

「よう」

「!?!」

俺は懐かしい声を聞いた忘れるはずもないだってこの声は・・・!!

「ずいぶんと久しぶりだな、勇」

「・・・守!」

忘れるはずもない真田 守、俺の前のジムの友人で宿敵でもあるお前を忘れるもんか!!

「ずいぶん見ない間に変わったな女子と一緒に下校とはしかも四人も・・・」

「うらやましいか?」

俺は少し皮肉を込めて守をからかった。

そんな事を言ってしかし守は・・・

「そんな冗談はいい、それよりお前のジムにも新人王戦のトーナメントは届いたんだろ?」

「ああ」

「話しは早い、俺はAブロックのシードお前はBブロックだ」

「それが何だそれを言うためにこっちまで来たのか?」

それだったらめでたいなと俺は思ったがこいつがそんな冗談をする

やつではないことは俺は分かっている。
すると守は・・・

「そんなんじゃない、俺はお前に伝えにきたただ俺はお前と、新人王戦で決着をつける!」

俺は確かになど俺は思うだって俺とお前は・・・

「俺とお前は中学の話しだがまだお前が俺と同じジムでスパークリングしでどっちも一勝一敗のままだお前とは東新人王戦の決勝戦でけりをつけるそれを伝えにきた」

「ああ、そうだな俺もそのつもりだ守」

わかりきった事だお前とのきっかけが俺がボクシング一筋にした男なんだからな。

そのお前とはよき友人だが今はライバルだ!

「勇、間違っても俺と当たる前に落ちるなよ」

「そっちこそ、天狗になって決勝にいき損ねるなよ」

「そんな、つもりはないじゃあな次に会うのは東新人王戦の決勝戦だ!」

「ああ!!」

その言葉をいって守はその場をさった俺は・・・

「守・・・絶対に決勝戦でな」

俺はその後ジムに直行したそしていつにまして気合いが入ったそう
新人王戦でのアイツとの約束を果たす為に・・・!!

第五話く後輩との出会い（前書き）

性格に間違いがあったら申し訳ございません

第五話　後輩との出会い

俺が守との約束を交わして3日がたったある日、俺達のクラスに、小さな生徒がクラスに訪れてきた。

その生徒は何とも小さく身長もこなたより小さかった。

こなたがその子に近づきその子の持っていた包みをもって何やらこなたは親しく話していた俺はそれが気になりこなたに声をかけた。

「おい、こなたその子、知り合いか？」

「あ、勇この子は私の従姉妹の小早川　ゆたかちゃんだよ」

「あ、小早川です、そ、その・・・こ、こんにちは」

あらためて見るとホントに小さいなと思った制服姿じゃなければ小學生に間違われそうな子であった。

あ、そんな事より自己紹介しなくちゃ

「あ、俺、神田　勇よろしくな小早川」

「は、はいよろしくお願ひします勇先輩」

あれ、何故に小早川は俺を下の名前で初対面なら普通は名字なはずなのにどうしてかなと俺が思った時、こなたが・・・

「あ、ゆーちゃんは男子が苦手でこんな感じでテンパっちゃうんだよ」

あ、成る程、男子が苦手かまあそんな女子も少なからずいるからなと俺は納得した。

「しかし、何で小早川が俺達のクラスに？」

「あの、お姉ちゃんがお弁当を忘れてそれを届けに私が来たんです、他の学年の場所は注目されてる見たいで緊張しました」

まあ普通は自分の勘違い何だが小早川は注目されたんだろうなと俺は思った。

「それじゃお姉ちゃん、勇先輩授業がもう少しで始まるからいくね」

「ありがとう、ゆーちゃん」

「じゃあな」

こなたは小早川にお礼を言って小早川はこの場を去った俺も小早川に別れの挨拶を言って俺は最初の授業の準備に入る事にした。

昼休み・・・

「何にするかなと」

午前の授業が終わり俺は今は購買でパンを買いに来ていた。

「（試合は、まだまだ先だからな焼きそばパンでも買おうかなでも、他のパンも食いたいし）」

俺が悩んでいると後ろから声がした。

「あ、勇先輩」

その声は小早川であった。

「よ、小早川、パンでも買いに来たのか」

「はい、クラスの知り合いと一緒に」

俺は小早川と一緒にいる人達が三人いた。
まず一人は・・・

「・・・こんにちは」

女子にしては長身でおとなしい感じな女の子で・・・

「先輩、よろしくす!」

もう一人は黒髪でメガネをかけて少し元気な女子で・・・

「ユタカ、から、ユウのこと、ききましたよろしくです」

最後は外国人の方でカタコトの日本語をしゃべっていた。

「ああ、よろしく」

俺は小早川の知り合いに一応、挨拶をした。

それから俺はパンを買い小早川建ちと廊下で話をしていた。

「勇先輩、プロボクサー何ですか凄いです!」

「ああ、とはいってもまだ四回戦のボクサーだけど」

小早川が俺がプロボクサーなのを知ってるのはこなたが俺の事を話したらしい。

「・・・それでも先輩は凄いです」

岩崎がそう言った、岩崎以外にも・・・

「そうすよ！先輩はすごいっす！！」

田村も俺の事を凄いと言うが俺は別に凄いとは思ってはなかった。
俺がそんな事を考えてると小早川が・・・

「あの先輩」

「ん、何だ？」

「先輩は、お姉ちゃんの事を下の名前で呼んでますよね」

「ああ、そうだけど」

確かに俺はこなた以外にも、かがみ、つかさ、みゆきなど下の名前で俺は呼んでいる。

「先輩はお姉ちゃんの事をどう思ってますか？」

「俺は友達と思ってるよ」

俺は正直に小早川に答えたこなたとは知り合ってそんなにたってな

いこれといった感情は俺にはない。
他のみんなもそうだ友達といった認識しか俺は思っていない。

「そうですか・・・」

何やら小早川は少し残念そうな顔をしていたが俺は何かしたかな？
俺がそんな事を考えてると・・・

「おお、これは、このネタは!!」

「おやくそくのテンカイネ!!」

田村とパティが何やら二人して何か言っていた、それと何がお約束だ？

「お前建ち何をやってるんだ？」

「いや、何でもないっす!!」

「ソウネ、このテンカイのつづきを・・・」

「わー、パティ、ストップ!!」

パーティが何やらいいかけたが田村がパーティの口をふさいだいたいなにを言いかけたんだ、こんなやり取りをして時間が過ぎちようど俺は四人と別れようとした時・・・

「じゃあな」

俺は小早川建ちに別れを言った。

「失礼します」

「・・・・・・・・（ペコリ）」

「さよならッス!!」

「グッバイネユウ!!」

俺が教室に戻ろうとした時であつた・・・

「あ、あの勇先輩」

小早川が俺を呼び止めた俺は振り向いたすると・・・

「あの、私の事をお姉ちゃんみたいの下の名前で呼んでください」

「あ、ああ・・・」

小早川はそれだけ言ってそのまま行ってしまった。
すると2人も・・・

「私もよろしくお願いします」

「私もひよりと呼んでほしいッス!!」

岩崎と田村が小早川と同じ事を言ってきた。それからパティはすでに俺にパトリシアとは言わずにパティと呼んでくれと俺に言ってきたのであった。

そんなこんなで俺はまた名前で呼びあえる友達が増えた、また女子だけだ。

それから俺は放課後、偶然にゆたか建ちとあい俺が四人の事を下の名前で呼んだ時にこなた、かがみ、つかさ、みゆきに一瞬だが怖い顔を向けられた。

第六話　東新人王戦一回戦

学校が終わり俺は今はジムに入る。
今はスパリングをやっている。

「ようし、あがれ勇」

俺は会長に言われてリングから降りた。

「今日の練習はもうおしまいにするぞ」

「え、しかし会長もう少し・・・」

俺は不安で仕方なかった何にしろ東新人王戦まであと3日まで迫ってるんだから不安になる、しかし会長が・・・

「ばかもん、この時期になって追い込んでしまったら新人王戦で力が出なくなるわい休むのも仕事の一つじゃ」

俺は会長に言われて仕方なく練習を切り上げた。

「ずいぶんとピリピリしてるな勇」

「赤木さん」

赤木さんが俺に声をかけたすると赤木さんが・・・

「まあ俺は新人王、何てあっさりと取ったからな小物は大変だーね
勇々君」

この人は・・・人が真剣に悩んでるのに・・・まあ赤木さんの理不尽
はこれに始まった事じゃないけどからかわないと落ち着かないだ
ろうなと俺は思った、何にしろこれまで赤木さんの試合は全て1R
ケーオだからな日本だけじゃなく東洋圏内の相手もかなり敬遠され
ているから最近はかなりイライラしている試合が決まらず・・・

そんなこんなで俺は赤木さんの相手をしていた。
試合前に・・・

学校・・・

「おはよー勇」

「・・・ああ」

俺はこなたに挨拶を返したしかし元氣が出ない昨日の赤木さんの相手をしていたからなああの人はホントに暇になると情緒不安定理不尽きわまらないからなハアゝ試合前なのに・・・

「あれ、元氣ないね勇」

「ああ、ちよつとな」

俺はとりあえず誤魔化したコイツもコイツで突っかかされるとメンドーだからな・・・

「それならかがみん達を呼んでくるよ、主人公キャラが元氣がないと話が盛り上がらないし」

「い、いや別に盛り上がらなくても」

だーあ！やっぱりこなたは！！

どうして俺はこうなるんだー！

この後・・・こなたが、かがみ、つかさ、みゆきの三人を呼んできた。すでに男子一人、女子四人のこのメンバーもすでにクラスではすで

に見慣れた光景だが、それ以来、俺の男子の視線が厳しくなった。それにこの事がジムの知り合いのバレたら後々メンドーになるのは間違いない小田さん以外に。あの人達の性格を考えれば・・・

「それにしても、勇くん試合もうすぐなんですよ」

「ああ、明後日にな」

かがみが俺に聞いてきたちなみに俺は元気を取り戻した。てか・・・こなたが原因だが何があったかは言いたくない。

「ユ一君の試合は見に行くよ」

つかさが俺にそう言った何故に試合の事を言ったのかはこなたが俺にむかって「私達が応援にいくよ、チアで」応援は俺は嬉しいがチアで来るのは絶対にやめろと俺は言った。

こなたの場合は冗談ではすまない場合があるからだ俺はかがみ達に絶対にこなたが暴走しないようにしろと俺は言った・・・何度も、何度も・・・。

試合当日・・・

「お前の試合はこの次じゃぞ」

「はい」

ここは控え室である、俺以外にも選手がいろいろと準備している。
ここは後楽園ホール、東新人王戦はここで試合をするのが決まりである。

ここは俺の様な四回戦等の前座の選手が使う部屋で俺は試合の準備をしていた。

そして・・・

「神田選手、時間です」

ついに俺の出番がきたいくぞ!!

「おおしっ行くぞいっ」

「はい！」

会長の返事に俺は元気よく答えた。

おれの東新人王戦の一回戦が始まる。

行く前に皆が・・・

「頑張れよ、勇」

田中が俺にそう言った続いて・・・

「まあ、頑張りたまえ貧弱君」

やっぱりこの人はあ、会長に追っかけられてる。

「貴様は少しは場を考えろ!!」

「俺なりのリラックス方をしたんだよ!!」

「いらんわ(怒)!!」

はは(笑)・・・まあ少しは落ち着いたかなそして最後は・・・

「いいか、自分のボクシングをしろお前の強打は本物だ自信をもて」

最後は小田さんやっぱりこの状況でもクールだなよし、不安は消えた行くか!

そして俺はリングにむかうそうアイツとの約束を果たすために・・・

俺がリングにむかうと観客はかなりいたまだ前座の試合なのにそれに観客の中には知ってるやつもいる。

「ユー君がんばれー!」

「絶対に勝ちなさいよ!!」

「頑張ってください！」

「決めちゃえ!!」

そこには俺の知り合い、こなた、かがみ、つかさ、みゆき、まさかなホントに来てくれるとは思わなかった。
こうなったら負ける訳にはいかないな！

こなた視点・・・

ホントにプロボクサーなんだ勇はホントに学校で見ると別人だね、
ここは精一杯応援しなくちゃ

「リミッター解除だよ勇！」

かがみ視点・・・

うわー本当に勇君なの学校とは別人見たいじゃない、本当に凄い、
それに何かしらこのこの感情・・・何に考えてるの！
勇君は友達よ友達、それ以外にはないんだから応援よ、応援。

「負けるじゃないわよ！」

つかさ視点・・・

本当にユー君なのかな、学校だといつもこなちゃんに振り回されてかわいいと思ったのにな、今はカッコイイやユー君を、今日はいっぱい応援しよう。

「頑張ってねユー君！」

みゆき視点・・・

ふふふ、普段では私達とではあんな感じな表情はしてませんね。普段はかわいい感じですけど今はカッコイイですよ勇さん、それと心のこの気持ちはなんでしょうそれよりは今は応援ですね。

「頑張ってくださいね勇さん！」

「ほお、貴様にも女性ファンが出来よったか」

会長が俺に言ったファンと言うより知り合いなんだけど・・・
そして俺はリングの青コーナーに上がったすると歓声が上がった。

「よいか相手は貴様と同じインファイターじゃ、下がったら負けじゃわかったか!？」

「はい!!」

そして相手はかなり気合いが入っていた。

髪型は坊主で顔も厳つい感じであって身長は170くらいであった。
そしてレフェリーが・・・

「これより、フェザー級4回戦を行います」

レフェリーが宣告した時に会場の客が静かになった。

「赤コーナー、浜田ジム所属、124ポンド二分の一秋山 剛ーっ！」

会場から拍手が出てきて秋山は手を上に上げて観客に答えた。

「青コーナー、陸桜拳闘ジム所属、124ポンド神田 勇ーっ！
！」

俺も観客に答えるように俺はおじきをした。

「なお、この試合は東新人王戦の一回戦です」

そしてレフェリーが・・・

「セコンドアウト！」

始まる・・・

「ラウンド1、ファイト！！！」

俺は相手と向き合った、まずはギリギリ相手との射程外の所で牽制しあっていた。
せして俺は・・・

「はあ!!」

「ふん!」

ジャブの差し合いになった俺はすぐに懷に潜りこむためにすぐに入った。

しかし・・・

相手のカウンターが俺を襲うがしかし、俺はガードした、俺の構えはピーカブースタイルアゴの下にグローブをガッチリと当てて相手のをのぞき見るスタイルである、主に階級の割りに身長が低いやつが使うスタイルで以外にガードが固い。

そして俺は相手のカウンターをガードしてそして右ストレートを打ったそして・・・

「があ!!」

ガードごと相手を吹っ飛ばしたのである。

これに観客は驚いた・・・

「何だ、アイツのパンチ!」

「ガードしてたのにぶっ壊して入りやがった」

そのパンチを食らった秋山は・・・

（何だよ、こんなパンチガードしたから大丈夫なものをマトモに食らったらたじやしまねーぞ！）

秋山は事実焦ったしかし、勇は・・・

（相手は面を食らってるな、いまだ！）

勇は左ジャブで秋山を迎え打っていた。
その重いジャブが秋山に襲う。

（ぐう、・・・これがホントにパンチかまるで石で殴られたみたいだ）

秋山のガードが下がり始めた。
そこを勇は見逃さない・・・

「だありやー！！」

勇の右ストレートが顔面にヒットした今度のダメージはデカイ、ガードはしてない直接にストレートがヒットしたからだ。
鈍い打撃音が会場に降り注ぐ。

そして秋山は倒れた・・・

「ダウン！ニュートラルコーナーへ！」

秋山はダウンした、しかも大の字で、これに観客は・・・

「ウォースゲー何てやつだ！」

「これでホントに四回戦なのかよ」

観客も勇の強打に驚いていた。
そしてこなた建ちも・・・

「すごい、勇！」

「何に、あの強さ！！」

「ユー君、凄い！」

「勇さんは強いです！」

こなた建ちも勇の強打、強さに驚いていた。そしてレフェリーが腕を交差した試合続行は不可能の宣告をした。

「勝者、青コーナー神田!!」

俺の勝者になったこれで俺は東新人王戦の一回戦を勝った。
そして俺はこなた建ちや観客の皆さんに礼をした。

「強かったぞ神田!」

「東新人王、絶対にとれよ!!」

まずは観客建ちから声援をもらったそして・・・

「すごいね勇!!」

「まあこなた同じこと言うけど・・・凄かったわよ!!」

「ユー君おめでとう!!」

「おめでとうございます勇さん!!」

そしてこなた、かがみ、つかさ、みゆきの四人に声援をもらった俺
はこんなに嬉しいことは初めてであったそこで会長が・・・

「よし、引くか勇よ」

「わかりました」

こうして俺の東新人王戦の一回戦が終わったそして次の二回戦に向けて俺は・・・

第七話　試合後の休養

昨日の試合で俺は見事に東新人王戦の一回戦を勝ちあがった。これでまず一步アイツとの約束を果たすことができたちなみに俺は今学校にいる、そして現在の時刻は昼休みの時間で俺はいつものメンバーで話し合っていた。

「昨日の試合はすごかったね勇」

「ありがとうな、こなた」

今は俺はこなた以外に、つかさ、みゆきと話しているかがみに関しては今は自分のクラスの知り合いと話しているらしい、いまおもったが、かがみは自分のクラスに知り合いがいるんだなと俺は思った。だっていつも俺達のクラスに昼休み来るからな・・・

「そういえば、ユー君？」

「何だ、つかさ？」

「今日は休みかな？」

つかさが俺に聞いてきたそう言えば確か会長が「お前は明日は1日は休養せい」て確かいつてたな俺はつかさに言った。

「ああ、今日は休みだよ」

「そうなの良かった」

つかさが笑顔で答えた何だかつかさの笑顔は癒されるよなと俺は思う。

「だったらさ勇、今日の帰りさゲーセンによろうよ!」

ゲーセンか・・・そう言えば最近、行ってないなこの際、行ってみるのも悪くないか俺はこなたに言った。

「良いよ別に」

「よしだったら皆と一緒に遊ぼう!!」

こなたが妙にテンションが高かったがまあいいか・・・

とあるゲーセン・・・

「で、何やるんだこなた」

「んーとねえあれ!」

こなたが指を指したのは格ゲーであった。

ちなみに今のメンバーはご覧のとうりのこなた、かがみ、つかさ、みゆきのメンバーでいる。

しかし、ゲーセンは久しぶりだな俺があんまり来ないうちにいろんなゲームがあるな。

「そう言えば皆は何をやるんだ?」

俺はこなたはやるのを決めているそこで俺はかがみ、つかさ、みゆきに聞いてみた。

「私は、シューティングかな?」

どうやらかがみはシューティングゲームをやるらしいしかし他の二人は・・・

「私にあんまりそういうのはやらないので最初は見てるだけにします」

「私も、お姉ちゃんやこなちゃんのやってる所を見てるよ」

どうやら二人はあんまりゲームは得意ではないらしいまあ、俺も最近はジムにいたからやってないからな。
それから各々、目当てのゲームに着いた。
ちなみに俺はこなたと一緒に格ゲーをやることにした。

「こなた負けないぜ」

「フッフ、勇よ私には勝てんぜ」

何やら普段のこなたとは雰囲気が違うがまあいいか・・・

「どうかな？」

俺だってそれなりにやりこんでだからな負けないぜ・・・

数分後・・・

『KO』

「ははは、何度やっても勝てないよ」

「・・・・・・・・ガク（涙）」

負けた・・・・・・・・しかも一回もポイントと取ることも出来ずに・・・

「こなた・・・・・・・・お前どんだけやりこんでんだよ」

俺はこなたに聞いたがこなたの薄笑いがいまだに俺の耳元に響いた
それからというものの俺は後、数回こなたに挑んだが結局惨敗であっ
た・・・

「・・・・・・・・」

「ユ、ユー君、こなちゃんが相手じゃしょうがないよ？」

「そ、そうですね？」

うん、ありがとう、つかさ、みゆきでも逆に慰めて貰うと何だか悲
しい・・・

「いやーハイスコアが出たわ・・・ん、何があったの？」

「いや、かがみ今はそつとしてやろうよ」

「大丈夫、大丈夫だから・・・」

「大丈夫に見えないわよ（汗）」

この後は俺が何分かして建ち治りいろんなゲームをして時間が過ぎた、そして・

「ねえ、最後にあれやろ」

こなたが指したのはプリクラだった。

こなたの提案に皆は了承した俺は待とうしたがこなた達が「一緒に！」と言ったから俺も入ることになった。

「なあ、何故に俺がこの位置にいるんだ」

「平気だって、勇」

「ま、まあ勇君は変なこと考えることはないから平気よね」

「ユー君はこの位置であってと思うよ」

「私もそう思います」

ちなみに今の位置は真ん中に俺、前にこなた、左にかがみ、右につきかさ、後ろにみゆき、しかもかなり近い状態で・・・こんな感じにプリクラを取ることになった、しかも女子だけでプリクラを取るならわかるけどこれは・・・(汗)こなたは悪ふざけでわかるが、かがみは微妙に恥ずかしがってるし、つかさ、みゆきに関しては平然としてる。俺は絶対に二人は天然だと俺は思った。

こうしてプリクラを取り俺達はゲーセンを出て今日の休みの1日が終わった。

第八話く勇の災難（前書き）

久しぶりの最新だ！！
短いけどよろしく！

第八話　勇の災難

試合の休養が終わり俺はいつもどおりジムに来て練習をしていた
現在は・・

「ほれ左、右！遅いそこでワン・ツー！！」

「は、はい！！」

現在はミット打ちを会長とやっており現在3ラウンドまでやっている。

そしてミット打ちが終わり休憩の時間になったそこに・・・

「よう勇、お前に話がある」

「何ですか赤木さん？」

突然、赤木さんに話をかけられ俺は赤木さんについて行った

「おまえ最近、女と付き合ってるそうだな」

「ええ！？」

赤木さん何を言ってるんですか・・・!!

「とぼけるんじゃないーえ！試合の時に女のファンが出来たり休養中に女子高生と歩いて親しげに話してるのを見たんだよはつきりしやがれ！！」

「あ、赤木さん苦しくしい・・・」

真面目に苦しい首を絞めないでくれー！

「赤・・・木さ・・・んあれは自分のク・・・ラ・・・スの知り・・・合いですから付き合ってないです！！」

「そうか・・・それならよし！！」

俺はそう言って赤木さんは俺を離れたはあく助かった・・・
すると赤木さんが自分にさらに・・・

「いいか勇・・・ボクシングはハングリーなスポーツだ女と付き合っていたら絶対にチャンピオンにはなれねえからな覚えとけよ・・・」

はいわかりましたから怖い顔を自分に向けないでください！！

「赤木さんの言うのも正しいぜ勇・俺は女を捨ててボクシングや
ってるんだぜ・俺は・俺は・」

なんか田中まで来たよ・二人して顔が怖い・

「それって単なる八つ当たりに見えるぜ・お二人さん」

あ、小田さん！今の二人にそんな事を言ったら・

「「チキシヨーーーどうせ俺（俺様）はモテなかったよ！！わあー
ーチキシヨーチキシヨーモテるやつなんか！！」」

あーあ二人が・暴れ出したやれやれ・

「いいんですか・小田さん・」

「・・気にしない方が身のためだ・・」

この後は赤木さんと田中はいつも以上に練習中に暴れていた。
やれやれ・・・

後日学校・・・

「そんな事があつたんだ・・・」

「ああ、お陰で練習中は暴れまくりだったよ・・・」

現在は俺は昼休みでいつものメンバーで話をしていた。
まあ愚痴るのもたまにはいいか・・・

「でもさーモテない男が暴れて八つ当たりするのはサブキャラの役目だよな」

「またアンタはそんな事を・・・」

こなたがそう言ったが絡まれた俺の身になってみるよ、はあゝ

「でも・・・こなたの言うことに賛成できないけどその二人・・・ホントに最低ね」

かがみお前も言うか二人が聞いたらまた暴れそうな言葉だな多分絶対に俺に当たってくる、そして時間が過ぎて午後の授業も終わり学校が終わった。

帰りの下校中に・・・

「ねえ勇、帰り道でべったりして帰ったらまた二人のサブキャラが怒る気がするんだけど・・・」

「お前は・・・止めてくれ絶対に」

「そんな・・・主人公がハーレムの嫉妬を受けるのは常識なんだし・・・
(ニマニマ)」

「だから主人公てなんだよ！つうかいちいちトラブルに巻き込むな
！！」

ホントに勘弁してくれあの二人に見つかったら絶対にまた昨日のよう
な事が絶対にあるから。

「全くアンタは・・・こなたのペースに付き合ってたら勇君がもたない
わよ」

「ありがとう・・・かがみ」

全くこのメンバーで頼りになるのはかがみとみゆきくらいだぜ残りの
二人はつかさは天然で危なっかし所があるしこなたにしては例外
だ・・・

「ねえ・・・勇いま失礼なこと考えなかった」

「・・・ユー君・・・」

「イヤ、ナンノコトヤラ・・・」

全く説得力がない声で言ったがこなたとつかさが俺を睨んだやれやれ・・・

それから数分・・・

「じゃあな」

「」「」「またね！」「」「」

俺は四人と別れいつもの用に進むに向かった・・・

「よう・・・勇」

「あ、赤木さん何か？」

何か雰囲気は昨日と似てるまさかな・・・

「今日も見ただ・・・女と楽しく下校して親しくしてる所・・・」

「は、はあ（汗）」

何か嫌な予感がする・・・

「しかも四人と一緒に下校だー！テメーしかも全員かわいいじゃねえか！！」

やっぱり昨日の再現だよ!!

「お前は・・・やっぱり・・・殺す!!」

「赤木さん俺もお願いします」

「許可する・・・田中二等兵」

俺は命の危険を察知してそして・・・逃走!!

「「まちやがれ!!」」

「勘弁してください!!」

結局、昨日も今日もトラブルに巻き込まれた勇であった。

第九話　夏合宿1

現在は7月下旬・・・陸桜は夏休みに入る準備に入っていた。
そして俺はそこで黒井先生の話を聞いていた。

「えー夏休みに入っているからといっても学生の本文を忘れずに・・・」

夏休みの簡単な説明を受けていたがここまでなら普通に思うが最後の言葉に俺は呆れた。

「ていゆか、夏休み中に問題起こさんと言ってや！休みが無くなるやさかい！！」

（駄目だこの人・・・（汗））

多分クラスの皆が俺と同じ事を考えた俺は思った。

それから説明が終わりいつものメンバーで話しながら下校していた。

「いやー今年最後高校生活の夏休みになるとなんか寂しくなっちゃうね・・・でも今年の夏のコミケは・・・」

「あんたは・・・少しは受験の事を心配しろ」

「こ、こなちゃん（汗）」

いつものこなたのボケにかがみがツツコミを入れていたそのこなたの言葉につかさは苦笑いしていた。

いつもの光景でもあるが夏休みに入るとこの光景が見れなくなると少しは寂しくなると俺は思った。

「そう言えば勇さんは夏休みはどの用に過ごすんですか？」

みゆきが俺に聞いてきた大抵こなたとかがみの漫才の最中は俺はみゆきと話す事が多い。

「そうだな・・・俺は明日から海で合宿があるからな」

「そう何ですか・・・」

そう俺は明日から合宿があるのだ俺のジムでのプロ組やこれからプロを目指す練習生がこの合宿に参加するのである。

「でも、そうなりますと勉強とかあまりやりませんよね」

「みゆき俺は大学は行かないから大丈夫だってば」

「でも勇さんが大学を入らないと言って先生達が勿体無いと言っていましたよ」

そう俺は成績だけならば高い大学を目指さなければいくらでも入れる大学があるでも俺はプロボクサーとしてやって行く事を決めたからこの決意は中途半端にはできない。

「みゆきそれは俺が決めた道だからいいんだよ」

「勇さん・・・」

そんな感じでみゆきと話を進めていたらこなたが・・・

「おやおや勇はみゆきさんとの好感度を上げてる途中ですな♪」

「いい加減にしろお前は！」

「泉さんその・・・」

全くこなたはホントにやってくれるぜてか！かがみ、つかさ何をそんな怖い顔をしている何故かこなたも笑っていても目だけは怖い！

「それじゃあな皆」

こうしていつもの用に俺は四人と別れた。
するとこなたが・・・

「それじゃあ勇、明日に期待していてね！」

「はあ？」

どういう事だ俺は明日合宿で海に行くから会うことは無いんだぞまあいいかジムに行こう俺はこなたが言った意味を理解するのはこの明日の海での事であった。

それからジムで・・・

「よっしゃ明日から合宿だ気合いを入れるぞ!!」

「はいそうですね赤木さん!!」

ジムで田中と赤木さんが意気投合して合宿の事を楽しみにしていた
まあ練習ではなく別の意味でだけ・・・

「浮かれるでないぞ！貴様ら、ワシも出来る限り早めに合宿には合流するその気合いが出ないくらいに絞ってやるから覚悟しとけ！！」

会長の言葉に俺やこれから合宿に参加する練習生達は皆やる気を出していた。

皆いろいろとこの合宿に参加する理由がある赤木さんは浮かれてはいるが赤木さんは世界にむけて小田さんは日本タイトルマッチにむけてそして俺は新人王戦の三回戦がある相手はシード選手ではあるが絶対に負けない。

え？田中はえーと田中は新人王戦を一回戦で転けてしまった判定負けである。

まあ田中の事は置いといてまず俺は新人王戦に向けて出発だ。

「ようし目指せ新人王！！」

「ふ、じゃあ俺も勇に乗って目指すは日本タイトル！」

「俺様断然世界チャンピオンだ！！」

俺達三人はしかと気合いを入れた。

しかしその気合いが一人の男に・・・

「へへ、どうせ俺は今は目標なんか・・・」

田中である一人目標が見つからず落ち込んでいた。

さすがに気まづくなったので俺は田中から離れたそれに乗じて赤木さんと小田さんもついてきた。

「何で来るんですか！」

「田中の目の前にいちゃ気まづいだろ！」

「・・・同感です」

こんな感じではあるが俺達の夏の合宿が明日始まる。

第十話　夏合宿2

俺達の夏合宿が始まった海に着くとそこは海水浴に来ている人でいっぱいだった。

そんな海水浴に二人の男がそれを見ている。

「なあ・・・あの女なんか良さそうじゃねえか」

「いや、赤木さん俺はあの人も良いんですが・・・」

必ず合宿にくると女性の水着姿を確認している二人がいた赤木さんと田中である。

やれやれとにかく砂浜を歩いて合宿所に向かうとしたその合宿所は会長の知り合いが使っている練習所がありそこで練習する事になっている。

「赤木さん・・・やっぱり今年も・・・」

「当然だ！、普段鍛えている体を見せつけて今年こそは！！！」

合宿所には向かわず俺達がよったのはの更衣室だそこで俺達は水着に着替えた。

すると一人の練習生が・・・

「良いんですか、練習しなくて？」

「俺に聞くな・・・赤木さんに言ってくれ」

練習生に俺は言ったこの練習生も水着にしっかりと着替えているそんな事を言いつつでも会長に知られたら絶対に怒られそうだ。そしてメンバー俺達が海に出て場所を確保したすると決まって赤木さんは・・・

「よしやあ、海に行くぞ!!」

「「「おお!!」」」

小田さんと俺以外は赤木さんの言葉に同意した最初は戸惑ったもののどうやらナンパするきあるようだ。

しっかりと水着は持って来てるからな。

まあ俺も人の事は言えないか。

「あ、そうだ小田と勇は荷物番だわかったな！」

何故、練習生も海に行く事が出来るのに俺と小田さんが海にいけないかは理由もある。

俺は去年も同じように荷物番をやらされたが小田さんは去年までは普通に海にいていたしかし赤木さんが海でナンパした時に全部その女性が小田さんに捕られた経験があるらしくそれが原因だと俺は思った。

「いや、暇ですね小田さん」

「そうだな・・・」

赤木さんが海に行って何分かたった小田さんと話が続かなく俺は悩んだ普段ならボクシングの話題で結構話すがこのような場所でするかこの雰囲気ですっていくのが難しい。

そんな事を考えていると一つのビーチボールが俺達の場所に飛んできました。

すると一人の女性が・・・て！

「ヤッホー勇！」

「何でお前がここにいます!?!」

何でこなたがここにいますんだよ！

「こなた、ボール・・・あ、勇君」

そこにはかがみもいたそれだけではない俺の知っているメンバーはそこにいる。

こなた、かがみ、つかさ、みゆきがいるからだ。

他にも・・・

「あ、勇先輩こんにちは」

「・・・こんにちは」

「どうもっス、先輩！」

「ハローユウ」

そして後輩組のゆたか、みなみ、ひより、パティもいた。
何故にこの海に来ているか気になるがするとこなたが・・・

「ねえ、勇がここにいるの合宿に行くんじゃないの？」

「あ、それかそれならここに俺達の合宿所があるからな」

「でも、何で海に来てるのもしかして・・・」

こなたが何か変な目で俺を見た何かこなたが変な事をいう前に俺は
こなたに言った。

「勘違いするなよお前は・・・」

「まだ、何も言っていないよ」

結局俺はこなた達に何故海に来てここにいる事を説明した。
するとこなたが……

「ねえだったら勇、こっちで遊ばない」

「え？」

こなたの発言に思わず声を出してしまった。そこにかがみやつかさも……

「そうよ、そうしなさいよ勇君」

「へへ、ユー君が来てくれると嬉しいな」

かがみやつかさもそう言ってくれた。
俺はしかしここで留守を頼まれているがすると……

「行ってこいよ勇」

「良いんですか？小田さん」

「ああ留守は俺が見てやるけど夕方にはこっちに戻れよ練習の時間があるからな」

小田さんに言われて俺は・・・

「ホントにすいません」

「別にいい」

こうして俺はこなた達と一緒に行く事になった小田さんには感謝しないとなと俺は思った。こうしていつものメンバーで海で遊ぶ事になった。

十一話　夏合宿3

小田さんと別れた俺はこなた達と行動する事になったがどうして同じ海にいるのか凄く気にはなったが、そこは気にしない事にしたが他にも俺の知っている人がそこにいた。

「先生・・・どうしてここにいますか？」

「なんや、神田やないかお前もここにいたんか」

そこにいたのは俺のクラスの担任の黒井先生でした。

こなた達がいたのにも驚いたがまさか・・・担任まで同じ海に来てる事にビックリしました・・・。

偶然で恐ろしい・・・。。。

「何って俺は合宿に来てるんですよ」

「だったら何で海に来てるんや？」

仕方なくこなた同様、黒井先生に俺はどうして海に来てるかを教えてあげた。

俺が説明をしたら黒井先生が・・・。

「なんやて・・・海でナンパ・・・ここにナンパする女性がいるやないか神田!!」

「あ、あの落ち着いてください先生・・・（汗）？」

まあ一応、黒井先生は黙ってれば綺麗なんだけどこの人の性格を考えれば絶対にナンパはされないなと俺は思った・・・。

「神田・・・おんどれ何か失礼な事を考えんかったか？」

「い、いえ考えてません!!」

うわ、人の心を読んだのかこの人！

相変わらずこなた達にしろ先生にしろ、どうしてこう俺の考えを読むか不思議に思った・・・。

「先生の事はほつといて勇、遊ぼうよ」

「そうよせっかく海で遊べるんだから」

こなたとかがみが俺にそう言った。

おまえら何気に先生に酷い事を言っていないか……………。

「そうだな人数はけっこういるからな……………」

俺を含めて人数は九人（先生は入れてない）もいるからな何して遊ぶか迷うよな……………するとみゆきが。

「でしたらビーチバレーはどうですか？」

みゆきの提案に俺も納得した確かにビーチバレーならこの人数なら遊べる競技だ。

そして皆も賛成した、そしてチーム訳が始まった……………。

「じゃあ始めましょう……………」

こうして始まった何やらこなた、かがみ、つかさ、みゆきの四人が何やら気合いが入ってるのが気になった、そんなにチーム訳が重要なのか？

「私のこの手が真っ赤に燃える！！勝利を掴めと轟き叫ぶ！！」

こなたはこなたでドン・ツシュの技をやっていました。

そして他の三人も気合いが入ってます。
なんか怖いけど……。

「「「「「グーとパーで別れましょう!」」」」」

そして結果は……。

こなた・グー。

かがみ・パー

つかさ・パー

みゆき・グー

ゆたか・グー

みなみ・グー

ひより・パー

パティー・パー

俺・グー

との結果になった……。

「頑張りましたよ勇先輩」

「・・・よろしく願いします。」

ゆたかとみなみが俺にそう言ったがやはり・・・二人を見ると仲良しだなと俺は思った・・・。

そんな事を考えているとこなたが・・・。

「ねえ勇、ゆうちゃんに手を出したら・・・・・・・・」

「やりません!!」

俺がゆたかに手を出したら犯罪者になるだろうが間違っても手を出しません。

「お姉ちゃん勇先輩はそんな事はしないよ」

ゆたかお前は優しいな・・・。

「わかんないよ、ゆうちゃん男はオオカミだからね・・・」

誰がオオカミだ! 誰が俺はそんなゆたかに手を出すほど落ちぶれて

いませんから!!

このままじゃ拉致が開かないな・・・。

「とにかく早く始めようぜ」

「そうですよ泉さん」

みゆきと俺はこなたにそう言った・・・こうしてビーチバレーが始まった・・・。

「えい」

「よっと!」

けっこう皆充実して楽しんでた。

しかしこの構図はやはり不自然に思ふな俺は女子八人、男子一人はいくら何でも不自然な光景だなと俺は思った、なんか周りの人も俺にたいして殺気を感じるし・・・（汗）？

「なんだアイツ可愛い子を独り占めしやがって？」

「このやろう見せつけやがって？」

「アイツは男の敵だ・・・」

「ゴ○ゴ13にアイツの暗殺の依頼を？」

なんかいろいろと怖い事を言っている人たち（男）がいます。

最後の人は絶対に危険を感じた別の意味で・・・。

「どうしました勇さん？」

「い、いや何でもないよみゆき」

そうだ今は皆で楽しく遊んでいるんだ周りの言葉は気にしない、気にしない・・・。

こうして俺の楽しい時間は続いた。

ビーチバレーをやったり海で遊んだり、俺のこれまでの高校生活を考えると楽しいことだらけであった。

そして時間は過ぎて夕方になっていた・・・。

「そろそろ時間だから戻るな」

「え、もう行くの勇」

「ああ、もう夕方だからな・・・」

そろそろ戻らないと赤木さんや小田さんを待たせてしまうからな・・・
・そろそろ行かないと・・・。

「私達は明日もいるからね」

「また明日、会おうねユー君」

かがみとつかさは俺にそう言ってくれた・・・そうか明日もか・・・
・また会えるのか・・・。

「そうかまた明日な！」

こうして俺は皆と別れ小田さんの入る所に戻った・・・。

そして・・・。

「小田さん、もう来ましたか？」

「いや、まだ来てないな・・・」

あれ、確か夕方には練習を始めるのにあの人達どこにいるのやら・・・。

「よう、今帰った・・・」

あ、赤木さん達が帰ってきたなんか元気がないけど、どうしたんだ？

「結局、女は俺達に振り向かなかった・・・チキショー!!」

「「「チキショー!!」」」

どうやらナンパに失敗したらしいなこの人達、赤木さんの言葉に釣られて他の奴等も声を合わせていた・・・やれやれ。

「明日はナンパを成功するぞお前ら!!」

「「「はい!!」」」

手を握って誓いを立てる赤木さん達・・・練習はどうしたんだよ・・・。

「それより赤木さん早く練習を・・・」

「そうだな野郎共、今日は暴れるぞ!!」

「「「はい!!」」」

とりあえず俺は赤木さんにこなた達と遊んだ事は内緒にしよう今のこの人に知られたら絶対にまずいと今日は思った。

そして今日の合宿の練習は赤木さんと田中を含め練習生は激しく燃えていた・・・。

第十二話　夏合宿 4

夏合宿の初日が終わり・・・そして朝になる朝の五時に起床する俺達・・・。

夜に合流した会長の声に俺達は起きる・・・。

「起きんかお前ら!!」

「」「はい!!」「」

皆が気持ちよく寝ていたが会長の言葉に皆は起きる・・・。

まあ俺は直ぐに起きたから問題はないけど赤木さんは凄く不機嫌であつた・・・。

「ジジイ!もう少しましな起こしかたはないのかよ!!」

「やかましい!!ボクサーなら早起きは慣れとるだろうがさっさと着替えてロードワークに行かんか!!」

会長と赤木さんの喧嘩がまた始まった相変わらず懲りないあの人達・・・。

おっと俺も着替えなくちゃと・・・。

「それ、ダッシュ十本それを五セット!!」

海の砂浜には誰もいないそこは俺達が練習している奴等しかいません・・・。

砂浜のダッシュはキツイな・・・やっぱり・・・。

「」「ぜえ・・・ぜえ・・・ぜえ・・・」「」

砂浜のダッシュを甘口、見ていた練習生はダッシュが終わってすでにへろへろであった。

砂浜でのダッシュは路面での走りと違い足のつま先をよく使う為に普段の倍は疲れる・・・俺は去年は経験しているから大丈夫であったがプロ組以外はダウンしていた・・・。
しかし会長の渴が皆に入る・・・。

「これでへこたれるな!!戻ってシャドーを三分を五セット、それとスパークリングを一人、3ラウンド3セットじゃ!!」

「」「そんなー!!」「」

皆の素直の気持ちが見れる大抵この合宿を経験した練習生は大半は

プロを諦めてジムをやめてしまおう。

今年は十人が参加してるけど何人残るのやら・・・。

こうして合宿所に戻り直ぐにシャドーとスパークリングの準備をする為に戻ろうとするが大半は足がなかなか動かず走っていなかった・・・まあ気持ちはわからないでもないが・・・そんな奴等に会長の言葉が走る・・・。

「さっさと戻らんか!!」

「「はい!!」」

会長の言葉に練習生は直ぐに走ったやっぱり会長の言葉は凄いと思った俺であった。

それから合宿所に戻りそこでシャドーをやるものスパークリングをやるもので別れ、俺はサンドバックを叩いていた・・・。

ドゴン!!・・・ドゴン!!

勇が叩くサンドバックの音に周りの練習生は啞然としている。

サンドバックを叩く打撃音がまるで違う為に啞然としていたが勇の気合いの乗りにも圧倒されている。

そんな勇を見て花山は・・・。

(ほう・・・勇のやつ気合いの乗りがええの・・・)

勇の気迫にへロへロだった練習生も気合が乗り始めた赤木もそんな勇に……。

（へ、勇のやつやる気を無くした奴等の根性を逆に燃やしやがった・
・こいつは今年はどうなるか予想がつかねえな）

勇の影響で周りの空気が変わった事に赤木は気付いており、その表情はまるで何かを楽しみにしている顔であった……。

それから午前の練習が終わり昼食の時間になり食べ終わった頃には昼の一時になっていた、そんな花山が……。

「二時間の休憩、ちゃんと休む用にそれまでは自由じゃ」

花山がそう言って午前の練習が終わり、練習生はその場で倒れて休憩した・皆、疲れはてて倒れており爆睡している練習生もいるくらいだった。

そんな中で約二名、海に行く準備をしていた……。

「よし、この時間にナンパしに行くぞ！」

「はい、赤木さん!!」

赤木さんと田中であつた・あれだけ動いてナンパする気力があるのかと練習生は唾然としていた。

二人はそんな疲れがない様にダッシュで海に向かって行つた。そんな中で小田さんが俺の所に現れる。

「相変わらずだな・あの二人は・・・」

「いや、全く・・・」

何処にあんな体力があるかホントに不思議に思う・・・。

そんな中で俺は・・・。。。

「ちょっと外に行ってきます」

俺はそう言つてジムを出た。

とりあえず外に出ると・・・暑い海にいるから余計に・・・。

そう思い俺は・・・。。。

「少し・・・海に行つてみるか・・・」

無論、俺はナンパをする気はない少し海を見ながら休憩するのも悪

くないと思ったからだ・・・。

そして少し歩くと海に着いた、そんな中である二人組を見つけた・・・。

赤木さんと田中であつたそこでナンパをしていたが女性は普通に赤木さんと田中の申し出に断っていた。

あ、また新しい女性に目を着けた行動が早いな・・・。

そんな二人を見ていると俺はある女性が話をかけてきた・・・。

「勇さんですか？」

「・・・みゆき」

そこにいた女性は俺の知り合いのみゆきであつた。

どうしてみゆきがここにいいのか気になった俺はみゆきに聞いた・・・。

「どうしてここにいるんだ・・・泳がないのか？」

「あの・・・私、どうも水や海水が目に入るのが苦手なんです」

「・・・そうか」

そんな話をして少しの間、黙ってしまった。そんな沈黙を破ったのはみゆきであった。

「あの勇さん隣・・・いいですか？」

「あ、ああ別にいいけど・・・」

みゆきの申し出に俺は少し緊張した。

だっていくら知り合いと行ってもみゆきは女性でしかもみゆきはスタイルも良ければ顔も美人だそんな女性が隣に座していると緊張する・・・。

「勇さんボクシング・・・楽しいですか」

「え？」

みゆきにそう言われた俺は少し呆けて声を上げて言った。

みゆきは続けて俺に言った・・・。

「勇さん・・・私は勇さんが傷つく所を見たくありません・・・」

「何で、そんな事を俺に・・・」

俺はそう言いつた。

みゆき一体どうしたんだ・・・。

「勇さんは本来は優しい人ですそんな勇さんがどうしてボクシングをやるのか私にわかりません・・・」

その言葉で沈黙が続く俺はどうみゆきに言えばいいかわからなかった・・・。

どうしてボクシングを続けるのか・・・・・・・・みゆき。

「すみません勇さん変な事を言ってしまった・・・」

「いや、いいんだよ、みゆき・・・」

俺はそうみゆきに言った・・・いやそれしか言えなかった。

そして俺は立って振り変える。

「ごめん、みゆき俺・・・そろそろ戻るから」

「・・・勇さん」

ごめん、みゆき俺はわからないどうしてボクシングをやってるのか
まだ答えはわからない・・・。

そして戻ってからは午後の練習に向けて俺は休んで目をつぶった・
・みゆきに言われた事を思っで・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7226i/>

らき☆すた～高校ボクサー

2010年10月9日13時26分発行